

# ようこそ棚田へ! 就農シェアハウスを集落に

岩首談義所



## ■ 団体設立経緯

2007年の3月、岩首集落の中心に建てられた小学校が128年の歴史をもって閉校になりました。集落民の母校であり、木造校舎の設立に関わった人も多く、寂しさが募るいっぽうで、最後の生徒数は5人にまで減っており、統廃合は免れませんでした。

思い出の小学校が、集落の中心で廃屋になっていく姿をみたくないという思いから、「旧岩首小学校の有効利用を考える会」が発足しました。同時期に朱鷺の放鳥でたくさんの研究者が佐渡を訪れていたご縁で、東京工業大学の桑子教授らの協力のもと、集落民有志が旧岩首小学校を拠点に、都市住民との交流活動や棚田をはじめとする里山の耕作保全ボランティアを募り、利活用に努めきました。その後、名称を「岩首談義所」に変更。集落民もあわせて、年間4000人ほどの利用者があり、大学生ボランティアは年間200名ほどの受入れをしています。

設立年月……2007年6月

メンバー数……46人

代表者名……大石 惣一郎(おおいし・そういちろう)

〒952-0857新潟県佐渡市岩首573(旧岩首小学校)

代表 大石惣一郎、事務局 新田聰子

ホームページ <http://iwakubi.d2.r-cms.jp/>

facebookページ

<https://www.facebook.com/iwakubi.dangi/?fref=ts>

<団体のミッション>

旧岩首小学校の有効活用を図り、岩首集落の活性化、

地域資源を活かした活動を行う事を目的としています。

棚田等の里山の利活用、環境整備、学生・都市住民等との交流事業を行っています。

## ■ 地域概要

新潟県の北西40kmの海上に位置し、面積は東京23区の1.4倍の大きな島であり現在人口は6万弱。「日本の縮図」と表現されるように、特色ある自然・歴史・伝統・文化が、たくさん残され、豊かな自然と生き物に溢れている佐渡は、2011年に世界農業遺産に石川県の能登地域とともに登録されました。

沿岸には、条件不利地にも関わらず耕作を続ける田畠が広がり、懐かしい日本の原風景が残っています。島の南東部の前浜地区にある岩首集落は、佐渡一の棚田の景観と、2匹の鬼が勇壮に舞う鬼太鼓が継承されている56世帯、120人弱の集落です。兼業農家が多く、水稻栽培、果樹(柿)、園芸などをを行いながら、街場に仕事をして暮らす人が多い集落です。周辺地域は、佐渡島内でも著しく衰退している地域であり、集落によっては住人が10人を切る集落もでてきてています。

## ■ 活動に至った理由・背景

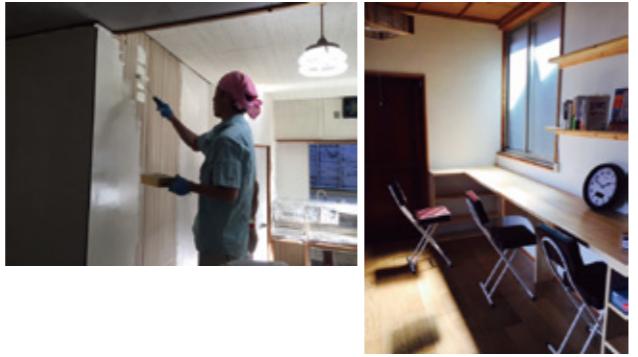
旧岩首小学校の利活用を考える会(現 談義所)の発足後、様々な外部の協力者を得ながら、棚田の利活用を中心に行なう活動を行い、交流人口も増え、集落を訪れる人は増えました。しかし、地域住人は減る一方であり、住民の中にも「こんな地域には若い人は住めない」という意見が多くありました。2013年に佐渡で初めて地域おこし協力隊を受入れ、一緒に活動をスタートさせました。お客様としてではなく、同じ集落に住む住人の目線で談義所の活動をする中で様々な気づきがありました。岩首を訪れるお客様の中には、実際に住んで暮らしをより身近に感じてみたいという人たちがいること、移住してきた協力隊の人には、集落にこの先も住んでいたいという思いがあること、住民も本当は一緒にこの集落で暮らす人を求めているということ。

そんな気づきの中で、集落にある空き家の活用を考えるようになりました。棚田を含めたこの地域をもっと知つてもらえるように、お試しで滞在できる住居の整備をしながら、仲間づくりを行いたいという思いが繋がり活動に踏み切りました。

## 活動内容と成果

### 目標

棚田の景観・農法の継承と集落の祭りを岩首の住人として一緒に繋げていく人を、受け入れ、育てるための拠点となるシェアハウスの改修。受け入れ態勢の構築。



集落内の空き家所有者への声かけを実施し、海岸沿いで目立つ場所にある築60数年の「源十郎」宅が改修候補になり、交渉を進めました。十数人の出入りがない家でしたが、談義所が中心となり、集落として移住者受け入れの第一歩となるシェアハウスの工事をはじめられることになりました。

### < 大掃除 >

第一段階として、親戚の方と談義所メンバーで家に残っている全てのものを一階の御前に集め、整理しました。衣類、寝具、古書、雑貨などすべてを集め、分別し必要なものだけを残し、他のものは人に譲ったり、ガレージセール用に倉庫へ保管しました。

子供たちには、古い障子はがしや、大量にある食器の仕分けに参加してもらいました。仕分けた食器類は仕事帰りの婦人会の奥様たちが埃を落とし、きれいに一枚一枚洗ってくれました。



### < 改修 >

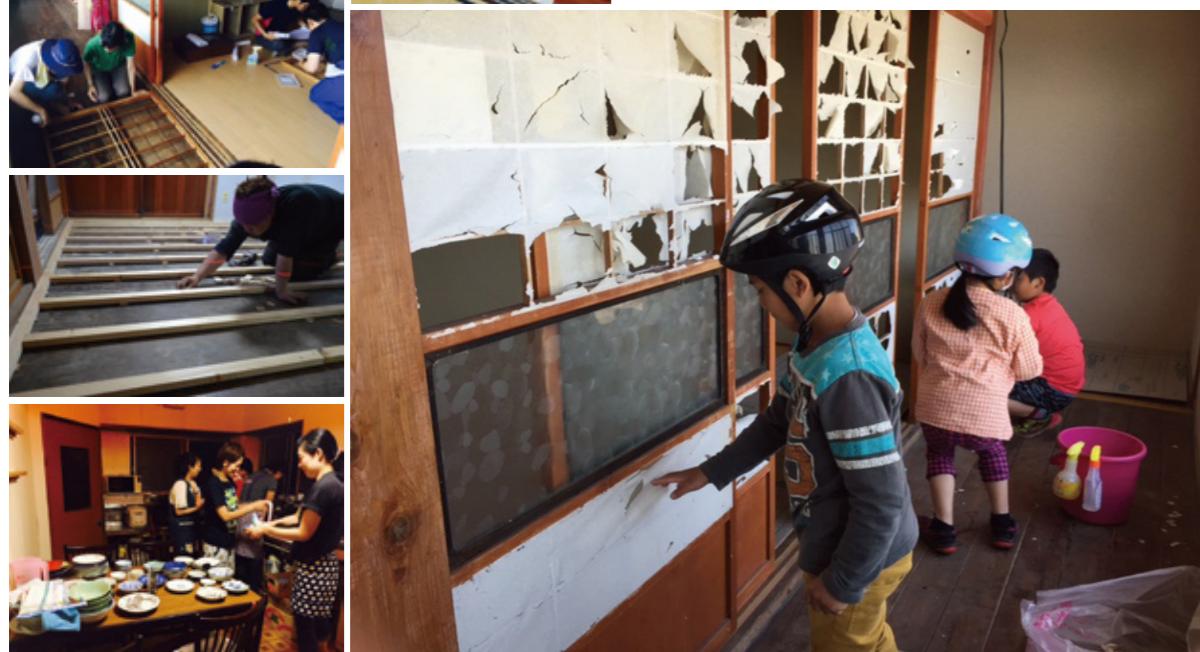
空っぽになった家を隅々まで点検し、地元の大工と共に改修箇所の確認を行いました。間取りを図におこし、各部屋がどんな用途で使用できるかもあわせてビジョンづくりを行いました。大規模改修が必要な2部屋のイメージをつくり、共有スペースとして人が集い、居心地がよい空間づくりを目指すことにしました。

屋内改修は、大きく3ヶ所。台所、納戸、小座敷を床部分から張り替え、台所は雨漏り箇所の修繕。屋外は、外壁の板張り替えと防腐剤等で塗装を行うことにしました。地元大工の指導のもと、材料を調達し、あとは集落民が空いた時間にそれぞれのペースで作業に参加してもらえるように調整し、声かけをしました。

台所の部分は、雨漏りがひどかったので屋根を補強。新たに天井部分を張り替え、壁も塗装し直しました。

基礎などの工事は、地元大工がボランティアで作業に加わってくれたおかげでとてもスムーズに作業を行えました。

塗装などの作業は、主に青年会の20代、30代の若者たちが担当し、細かい清掃作業などには学校帰りの子供たちや、近隣に住む中高年の方々が出来る事をしてくれました。



### < 昔の住人からこれからの住人へ >

納戸の床板をはがしていた際に、床下から囲炉裏ができました。増改築の際に埋められてしまったようです。位置的には使用できないけれど、この部屋のコンセプト「居心地のよい空間」には、なくてはならないと思い、地元左官と共に部屋の中心につくりなおすことにしました。

使い勝手が悪くなってしまったものでも、形を少し変えれば立派に機能するはずです。シェアハウスに集う人が囲炉裏を囲む日が楽しみになりました。骨組みだけ残して、新しくすればもっと住みやすいかもしれません、集落の人の思い出が残る場所やものはできるだけ残していきたいと思いました。



## < 移住者受け入れに向けて >

シェアハウスの改修と同時に進めてきたのが、集落での受け入れ体制の構築です。談義所メンバーや集落役員会と共に、棚田の耕作保全の担い手育成のための農業指導者や土地提供者の選定などを行いました。集落総会などでも、進捗状況などを伝え、地域に住む人たちにとって身近な活動になるように努めました。また、作業に関わる機会を集落のそれぞれの人につくり、作業後の慰労会の場でそれが考える岩首の未来について少しずつ言葉にしてもらいました。普段は、なかなか思いを表出しない人が多く、それぞれの思いを共有していく作業を積み重ねていくことの大切さを知りました。集落の次世代を担う若者たちを育てていく意識も必要です。

## < 内覧会 >

8月16日には集落民向けの内覧会を実施しました。普段作業に加われない高齢者や、お盆で帰省中の方々など、たくさんの方が久しぶりの「源十郎」宅で思い出話に花を咲かせました。普段使いの玄関横の御前の大きな玄関を開けると、家の中まで外から見え、中に入らない多くの人たちも目を向けてくれました。近隣集落の方

からも、「気になっていた」という声をかけて頂き、各集落でお話をさせて頂く機会も頂きました。

## < お試し宿泊のお試し >

9月20日は、集落の例大祭でした。お祭りには、いつもたくさんの人たちが訪れる集落の人口も2倍以上に膨れ上がります。かねてからご縁のあった岩手からのお客さんが祭りにきてくれることになり、シェアハウスのお試し宿泊を実施することにしました。不便なところがないか、水回りに異常はないか確認しました。お客様にも意見を聞き、改善できることはその後の作業工程に加えました。

集落の祭りでは、外からきた一般のお客さんは家の中から鬼太鼓の門付けをみることは出来ず、外側から祭りを見学することになります。シェアハウスでは、宿泊者以外も自由に入り出してもいい、鬼太鼓の門付けを家の中からみてもらえるようにしました。少しの違いですが、それだけで祭りがもっと身近になり、地域の人とも交流できるきっかけになります。

久しぶりに祭りで家の灯りがついた源十郎宅での門付けは、改修を始めてから半年が経ち、一つの節目となつた日でした。



## < シェアハウスで住民交流 >

談義所でも様々な住民交流の場を設けてきましたが、参加者がどうしても偏った世代でした。そこで、シェアハウスの改修工事から積極的に集落の青年会、婦人会、子供会に声をかけ、関わるきっかけづくりを行ってきました。改修工事もひと段落した、秋ごろから月に1回程度、シェアハウス1階の共有スペースで交流会を開きました。休日も仕事の人が多く、夕方頃から1品持ち寄りでの食事会や、子供たちの冬休み期間中には談義所で行っていた寺子屋事業でクリスマスケーキづくりなどを行いました。

## < 成果 >

思い描いていた事が、本当に目の前で現実になっていった1年だったと思います。すべては、このタイミングだから出来たことだと思います。空き家の持ち主の方が、長年首を縊に振らなかったのに今年になって急にいいお返事を頂けたことに始まり、急に様々なものが動き出したように感じる年でした。

実際には、まだシェアハウスの住人はいませんが、短期のお試し宿泊は月に2、3人いる状態です。他にも就農目的ではない棚田散策のお客様や、様々な理由で岩首を訪れる方々の拠点にもなりつつあります。

大きな成果はありませんが、確実に談義所やシェアハウスを通して地域の事を話す機会が増えました。特に、若い世代にとっては、今まで集落について知らないことが多く、地域課題に対して何か行動を起こしたり、話し合ったりする事もなく、上の世代の人たちに任せていたような感じがありました。実際には、何も思っていない地域住人は1人もおらず、それがそれぞれの事情で、この先の未来について考えていることに気づかされました。

シェアハウスを完成させたことが成果ではなく、その過程にどれだけの地域住民が関わってきたかや、その活動の中でお互いにどんな思いの共有ができたのかが、重要だと思っています。それこそが、本来談義所が行うべき活動の柱であると思いました。

出来る事を出来る人が行い、無理をしないで、自分たちの身の丈にあった活動を行っていく事が大切だと思いました。

移住者を取り込むのも、外の人たちに岩首を知ってもらうのも今後大切になってきますが、やはり地域が元気で、自分たちの事を知り、好きな事を集落に見いだせる場所でないと魅力は伝わらないと思いました。

## 今後の予定

2017年には、旧岩首小学校が廃校になってから10年が経ちます。廃校になった数ヶ月後に活動を始めた談義所も同じ年です。10年の節目には、これから未来について何らかのアクションプランを集落に向け提案したいと思っています。それに向かって、月1談義を開き、集落と談義所の風通しをよくしようとしています。無理な目標ではなく、小さくても出来る事を増やしていくようなプランにしていきたいです。そこから住民1人1人が夢を描いてくれたらいいなと思っています。

シェアハウスの活動を通して生まれた若者たちの繋がりも、シェアハウス1階の共有スペースを使っての交流会を定期的に開催し、移住者との交流や住民間の交流促進にも繋げていく予定です。

談義所の活動は、継続して様々な人と棚田等の里山を通した交流事業や広報活動を進めていきます。佐渡市とも連携し、移住者に向けた事業の協力や受け入れを行っていきます。近隣集落の農家とも連携し、就農と住居のマッチングにも力を入れていきたいと思っています。

また、今まで岩首を訪れたことのある人や、岩首出身者で都市部に現在住んでいる人たちに細やかな情報提供を行い、リアルタイムで岩首について知つてもらえるようにオンラインサロンの開設を準備し、支援してもらえるような仕組みづくりをしています。

地域にある資源を活かして情報発信し、様々な人と関わることで沢山のチャンスを頂けるようになりました。今後は、そのチャンスを大事に今まで積み重ねてきた地域での活動を更に大切にしながら、まずは10周年に向かって進んでいきたいと思っています。

